

共同体行為としての“**Healing**”

現代詩が体现する **Implicit Alliance**

古村敏明

発表要旨

2024年に刊行されたアンソロジー、*You Are Here: Poetry in the Natural World*の序章にて、Ada Limónはbell hooksの以下の言葉を引用する：“Rarely, if ever, are any of us healed in isolation. Healing is an act of communion” (4)。癒しや回復の過程において、共同体が重要であることをbell hooksの言葉は示すが、Limónがこのエコポエトリーのアンソロジーの序章でbell hooksに言及する前提には、人間を含む自然界は新しい治癒を必要としている、という世界観がある。そして、その世界観の延長に、従来のエコポエトリーにおける、人間と、人間でない動物、自然界の構成員などはecological interconnectednessによって繋がっている、という考えにとどまらない、同じ場所に生息するものたちが意識している、あるいはしていないに関わらずその構成員たちの中に存在しうる、潜在的同盟性(implicit alliance)と呼称すべき概念が垣間見える。

本発表では、Ada Limónが2025年に刊行した詩集*Startlement*に収録された作品を主軸として、Limónが2024年に遂行した*You Are Here*プロジェクトで語られる理念や、Margaret Atwoodが2020年に刊行した詩集*Dearly*に収録された作品も考察しつつ、それらのエコポエトリーが体现しているようにみえるimplicit allianceの概念について考える。この概念化をとおして、現代社会が直面する環境問題や、それに付随するsolastalgia(環境的郷愁)やeco-anxiety(エコロジー不安)などの心理的悲痛に対し、現代詩は何をしようとしているのか、そして、当シンポジウムの命題の一つである、John Felstinerが2009年に刊行した著書のタイトル(*Can Poetry Save the Earth?: A Field Guide to Nature Poems*)ともなっている問い、詩は地球を救うのか(*Can poetry save the earth?*)といった問いに、これらの詩人がどう答えているかを解析していきたい。

Implicit Alliance (潜在的同盟性)

当シンポジウムの命題を考えるにあたって、まず、implicit allianceという概念を定義していきたい。環境人文学において、ecological interconnectednessという概念は、人間中心視点からの脱却という命題のもと、分野における基盤的な考え方として重要視されてきたことは周知のとおりである。環境システムの中における相互関連性や共同体性という考えを突き詰めると、より能動性を帯びたこのimplicit allianceという概念にたどり着く、というのが本発表の立ち位置である。つまり、現在直面する問題に対し、同じスペースに居住し運命を共有している以上、人間、人間以外の動物、自然界は、必然的に、潜在的・暗黙的な同盟の関係性にある、という考え方である。

Implicit allianceは、もともとは多民族比較文学研究において、アメリカ文学における人種・民族的マイノリティ同士の連帯を示すものとして、John Burns and Toshiaki Komuraが著書*Contemporary Japanese American and Mexican American Poets: Lyrical Solidarity* (Routledge, 2026)で提唱した概念である。アメリカという実験国家に参加し、何らかの苦難の歴史を持つという事実を共有している以上、人種・民族間には、明確な政治的連携や繋がりがあるかどうかに関わらず、潜在的に連帯や同盟性が存在する、という概念である。多民族集団の間に存在する潜在的同盟性という概念は、部分的に、種と種の間にある潜在的な同盟性という形でエコポエトリーにも応用できる、というのが、本発表の主張である。

Implicit allianceという概念がエコポエトリーにおいて垣間見られる一例として、Elizabeth Bishopの“Song for a Rainy Season”が挙げられる。この詩は、一般的には、BishopがLota de Macedo Soaresと共に暮らしたブラジル・ペトロポリスの山奥の家の情景を描いた詩として読まれ、滝や苔、フクロウなどの自然に囲まれ佇むこの家は、「オープンハウス」として、自然物全般に無防備に開かれている。その開放性が能動的に祝福されていることが、潜在的な同盟性の一つの形と読める。他の例としては、William Staffordの“Traveling through the Dark”という詩における、ロードキルとして死んでいる鹿と、そのおなかにいる生まれてくることはない子鹿、語り手、そして、語り手の葛藤に聞き耳を立てているかのような自然、との間で発生する共同体感覚も、implicit allianceの例と考える。自然自体が聞き耳をたてている、といった能動性や、“I thought hard for us all”という語り手の独白において、usという一人称複数形の代名詞から窺われる連帯性は、エコポエトリーにおける潜在的な同盟性の表現と捉える。

Implicit allianceという概念のポイントは、一つには、単に私たちが共同体の一部であるという受動的連帯を超え、運命を共にする同盟という能動性を示すものであるが、同時に、それを潜在的・暗黙的であると限定することで、その意図性や積極性を誇張しすぎないことでもある。この中間的な同盟性を説明するにあたり、その類似例として想起されるのは、Robert Frostの“The Tuft of Flowers”における、草刈りをしたであろう人物と、草が刈られずに残されている箇所を発見した語り手との間で、実際に会うことも言葉を介すこともなく発生する協働性である。

この詩は人と人との関わりを描くものであり、それはエコポエトリーにおける人間と自然界の潜在的同盟性とは異なるものだが、もしその終わりの行、“‘Men work together,’... / ‘Whether they work together or apart’”の“Men”の間での繋がりを、人間と自然界全体との繋がりにへと概念的に拡張したならば、この行は、その場に一緒にいるかいないかに関わらず、意図するかしないかに関わらず、同じ場所に存在していた者たちの間に暗黙的に存在する協働性を示す言葉になる。そのような潜在的協働性が、エコポエトリーにおける *implicit alliance* の定義である。

New Activism（新行動主義）

2025 年に刊行された詩集 *Startlement* は、New Activism（新行動主義）とでも呼称すべき、新しい形のアクティビズムを目指しているように思われる。先鋭的な環境保護運動とも、他者尊重の原則のもと読み手に委ねる受動的な文学とも、どちらとも異なる、能動的な文学と政治の融合、というものが、ここで言う New Activism の定義となるが、それを Limón の作品がどう体現しているか、その例をいくつか選択的に分析する。

Startlement には新作の詩も収録されているが、この新作群の、特に最後の 3 編で、Limón の New Activism の形が定まってきている。これら 3 編に共通している点は、どれも人と自然との関係性という大きなテーマのなかで *implicit alliance* の概念が体現されていること、あとがきにおいて、詩が書かれるきっかけとなった出来事が明記されていること、そして、どの詩も、何らかの公的機関や公共団体との繋がりの中で書かれていることである。

その 3 編の最初の作品“Startlement”は、U.S. Global Change Research Program (USGCRP) が作成した、アメリカが現在進行形で気候変動によって影響を受けている現実をまとめた報告書の、前付けのために書かれた詩である。気候変動についての啓蒙活動に身を捧げた筆者たちに触発され、自然界への驚嘆の念を表現する作品だが、“we were never at the circle’s center, instead / all around us something is living or trying to live”といったフレーズからは、旧来からの人間中心視点の脱却がうたわれる。だが、そこにとどまらず、The world が、“What we are becoming, we are / becoming together”とか、“Once we were separate, / and now we must move in unison”と語る様子は、連帯や同盟を示唆する。同時に、不明瞭な the world（世界）というものが主語であることは、その連帯や同盟は、まだ明示的に成立していない、潜在的に存在しているだけの関係性であることも示唆する。この詩から見えるのは、まだ成立していないがそこに確かに存在するビジョンとしての、*implicit alliance* である。

最後の作品“*In Praise of Mystery: A Poem for Europa*”は、2024 年 10 月 14 日に打ち上げられ、2030 年に木星圏に到着する予定の Europa Clipper という NASA の宇宙探査機のために書かれた詩である。この詩は、Limón 自身の手書きで、Europa Clipper の貴重品保管室に刻み込まれた。木星圏の探索に行き地球に戻ることはない探査機の中で、Limón 自身の直筆の詩が、宇宙のどこかでずっと彷徨っているという物質の永続性は、詩の精神の永続性を象徴しているように感じる。

木星に旅立つ宇宙探査機に捧げる詩には、宇宙よりも、地上の生物への憧憬が語られる。この詩の興味深い点だが、一人称複数形の使われ方である。自然を憧憬の対象にすることは歴史的に自然詩の領分だったが、“We are creatures of constant awe”という語りは、この語り手の認識において、自然の中に人間も含まれていることを示唆する。そして、“curious at beauty, at leaf and blossom, / at grief and pleasure, sun and shadow”と caesura によって整えられた lines には、生命への驚嘆が綴られる。

この詩が語る連帯も、まだ成立していないが存在する、暗黙的な *implicit alliance* の一形態だと考えられる。興味深いのは、語り手が“it is not darkness that unites us”と述べる点である。Margaret Atwood や Jorie Graham らの作品群に散見される dark ecology の詩への批判とまでは言えないと思うが、Limón のエコポエトリーが全般的に「希望」に焦点を当てていることから、dark ecology が示す世界の終末の想像や、環境破壊への不安や恐怖などによって社会を変えるよりも、希望を勝ち取るビジョンによる社会変革を志向していることが読み取れる。

結論

これらの作品群が示すのは、interconnectedness の概念に収まりきれない、同じ場所に生息するものたちの間に存在する *implicit alliance* と呼称すべき概念である、というのが本発表の主張である。環境的破壊から世界を救いたいと願いケアをする、共同体行為としての癒しがエコポエトリーの目的の一つだとしたら、私たちは一緒にいても離れていても *implicit alliance* という潜在的な同盟性でもって協働している、という概念は、ケアすべき理由の哲学的支柱の一つになりうるのではないだろうか、と考える。特に Limón の詩は、公的機関や公共団体との繋がりの中でエコポエトリーを生み出すという、本発表で New Activism と呼称する形態でもって、現代社会の閉塞感を打破しようとしているように思われる。この *implicit alliance* と New Activism の連動がどこまで新しい手法なのかという問いについては議論の余地があると思うが、この二つの概念の連動が Can poetry save the earth? という問いに対してアメリカ現代詩が提示する答えの一つではないか、という提言を、本発表の終着点とする。